

# やまとりばいせき 山鳥場遺跡

— 県道御馬越塩尻停車場線関連 —

**所在地及び交通案内：** 東筑摩郡朝日村西洗馬

1448-1 ほか

朝日村役場より東へ約 1.6 km。県道 292 号から 298 号を経てスタービレッジ東側。

**遺跡の立地環境：** 鎖川右岸段丘上、内山沢の形成した扇状地に位置する。標高約 780m。

**発掘期間：** 2016 年 7 月 1 日～11 月 30 日  
2017 年 4 月 5 日～10 月 31 日

**調査面積：** 2,880 m<sup>2</sup>

**検出遺構：** 14 軒、敷石住居跡 1 軒、土坑 13 基、  
焼土跡 2 基

**出土遺物：**

**土器・土製品：** 縄文土器（早・前期、中期後葉、後期初頭～晩期初頭）、土偶、土製腕輪、ミニチュア土器、土製耳飾、土製円板、焼成粘土塊

**石器：** 石鏃、石錘、楔形石器、削器、搔器、打製石斧、横刃形石器、磨製石斧、礫器、磨石、凹石、敲石、石皿、台石、石核、原石、剥片



図1 山鳥場遺跡の位置 (1:50,000)

## 発掘調査成果の総括

### 1 縄文時代中期後葉の集落遺跡

竪穴建物跡 14 軒を検出した (図 2)。当該期の集落は中期後葉において 3 期にわたり変遷し、各期 2～4 軒前後の竪穴建物跡が存在したと考えた。しかし、建替えや同時期の重複関係があるため、各期における竪穴建物同士の同時性を明確にすることはできない。また、遺構の分布が調査区外南部に広がることが推測され、集落の規模や構造の検討も今後の課題として残された。

建物の形状については、第 1 段階 (注 1) に円形を基調としたプラン (図 3) であったものが、第 2 段階に方形基調のプラン (図 4) が登場し、第 3 段階に方形基調のプランが定着化することがわかった。第 2 段階には掘込みの深い炉が登場する (図 5)。このほか、竪穴建物跡の出入口部で埋甕が出土している

(図 6)。また炉辺石の抜き取り (図 7) や土器敷炉 (図 8) など炉に関する多くの情報も得られた。今後、こうした行為の地域的、時期的な特徴に留意したい。

土器 (図 9) については、第 1 段階に縄文時代中期中葉末から継続する器形や文様要素が多いのに対し、第 2 段階は腕骨文や綾杉文等、新しい要素が登場し (26)、第 3 段階には松本盆地に特徴的な樽形土器 (77・79) が定着する。こうした建物や土器の変化は、鎖川の対岸に位置する熊久保遺跡 (注 2) でも認められており、地域の中でほぼ同時期に進んだと考えた。山鳥場遺跡では第 2 段階以降、土器の中に下伊那系 (17・32・87)、曾利式系 (41・88・116)、加曾利式系 (113)、中富式系 (117) など他地域の土器がみられるようになり、地域間の交流が活発であったことが推測でき、土器や建物の変化の背景に、こうし

た交流が影響した可能性を指摘したい。

石器（図 10）については、生業に関わるとされる石鏃、打製石斧、磨石類がほぼ均等な割合で出土した。一方、熊久保遺跡では、石鏃に比べ打製石斧と凹石が倍以上出土している。遺跡間での組成比率の違いについては、生業活動の差が背景にある可能性があるが現状では明確にできない。今後も遺跡間での比較検討を行い、集落における環境、性格等の諸要素の中で石器を位置づけて検討する必要がある。

## 2 貴重な後・晩期の遺構と遺物

後期の竪穴建物跡 1 軒と後期初頭から前葉、後期後葉から晩期初頭（図 11-1）を主体とする土器群が出土した。また晩期初頭と考えられる土製耳飾（図 11-2）が、破片も含めて 22 点出土した。山鳥場遺跡では過去に後期の石剣・耳栓が出土したとの記録もある。松本盆地では、中期に比べて晩期の遺跡の調査例が少なく、当該期の土器と土製耳飾がまとまって出土する例は非常に貴重である。

## 3 ダイズ属やクリを同定

種実圧痕同定では、大型のダイズ属が同定された点に注目したい（図 12）。近年の研究でダイズ属は縄文中期に種子が大型化する傾向があり、栽培の可能性が指摘されている。しかし、遺跡で栽培を示す遺構の発見は困難で、本遺跡でも栽培の根拠を検討するまでには至らなかった。

種実同定では分析した建物跡のすべての炉埋土からクリが出土した（図 13）。熊久保遺跡でもクリ材が建築材として用いられたと考えられている。縄文時代中期には「樹木利用の選択性がクリなど限られた樹種に偏重」したとの指摘もあり、クリが食料・建築材として重用されていたことが推測できる。

遺跡周辺の植生を検討するまでには至らなかったが、自然豊かな朝日村で縄文人の植物利用に関する基礎資料を提示できたことは重要である。縄文時代における植物利用の実態に一步ずつ近づくためには、今後花粉分析による集落周辺の植生の検討や、遺跡から出土する植物遺体をリスト化するなど、植物に関する情報を蓄積する作業も必要であろう。

## 4 まとめ

山鳥場遺跡の立地する内山沢流域には縄文時代の遺跡が 6 か所あり、縄文時代草創期から晩期までの生活痕跡が確認されている（図 14）。朝日村内で縄文時代全期間にわたり生活痕跡が確認できるのは現在のところ、内山沢流域だけである。このうち山鳥場遺跡では表採品も含めて縄文時代早期～晩期まで遺物が出土した。なぜ内山沢流域に縄文人の痕跡が多いかについては、容易に水源が確保できるだけでなく、内山沢が山を抜けて鎖川に合流するまでの距離が長く、流域に扇状地による広い平坦面が形成され、山々の影にならず日照時間を確保しやすい場所が存在したからではないだろうか。一方、三ヶ組遺跡における調査範囲では遺跡を確認できなかった。集落の形成に水源の確保が重要な要素ではなかったかと考える。

朝日村には豊かな自然があり、縄文時代の生活を考える適地といえる。自然の中で暮らしてきた先人たちの知恵に学び、この環境を将来に引き継いでいくことができれば幸いである。

注：1 時期区分については右記の成果を基にした。宮崎朝雄・綿田弘実 2013 「長野県における縄文時代中期土器の編年と動態」『一般社団法人日本考古学協会 2013 年度長野大会発表資料集』第 1 段階が 9 期、第 2 段階が 10 期、第 3 段階が 11 期に当たる。

2 朝日村教育委員会 2003 『熊久保遺跡第 10 次発掘調査報告書』

3 小畑弘己 2014 「4 マメを育てた縄文人」『ここまでわかった！縄文人の植物利用』新泉社

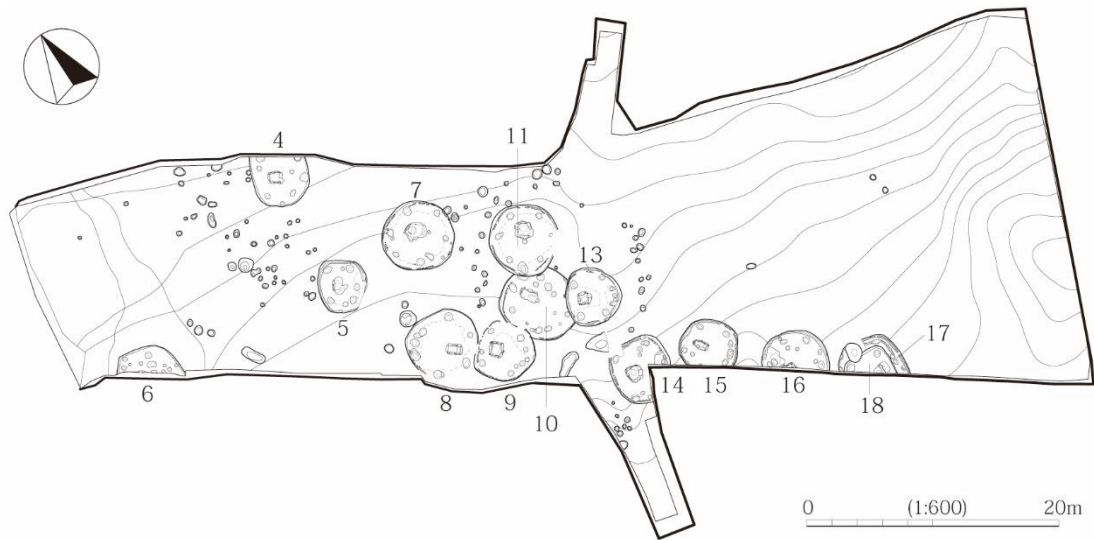


図2 縄文時代中期後葉の竪穴建物跡群



図3 円形基調の竪穴建物跡



図4 方形基調の竪穴建物跡



図5 掘込みの深い炉



図6 竪穴建物跡出入口部の埋甕

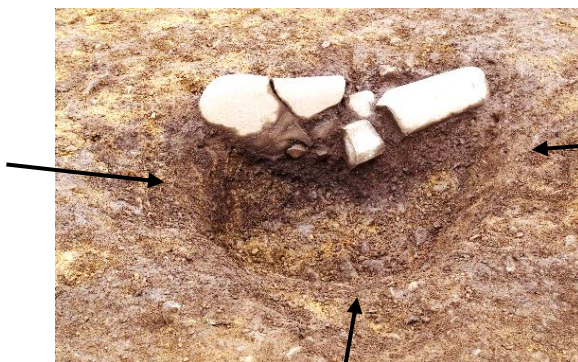
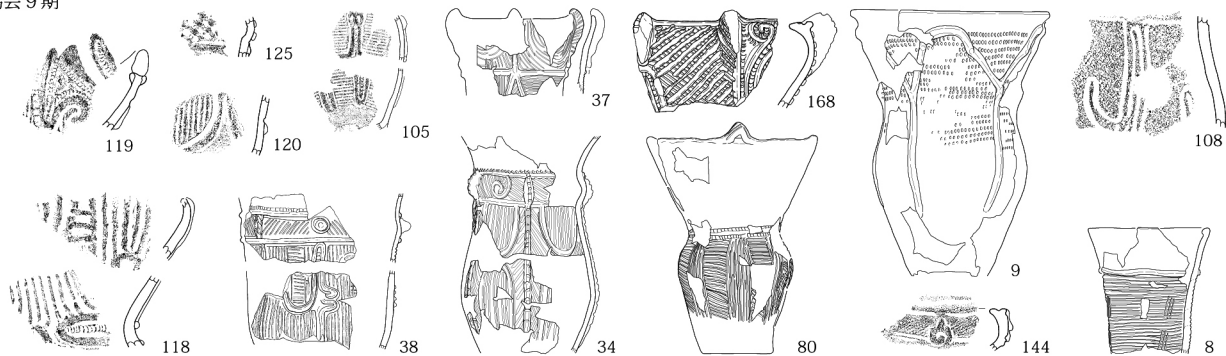


図7 炉辺石の抜き取り

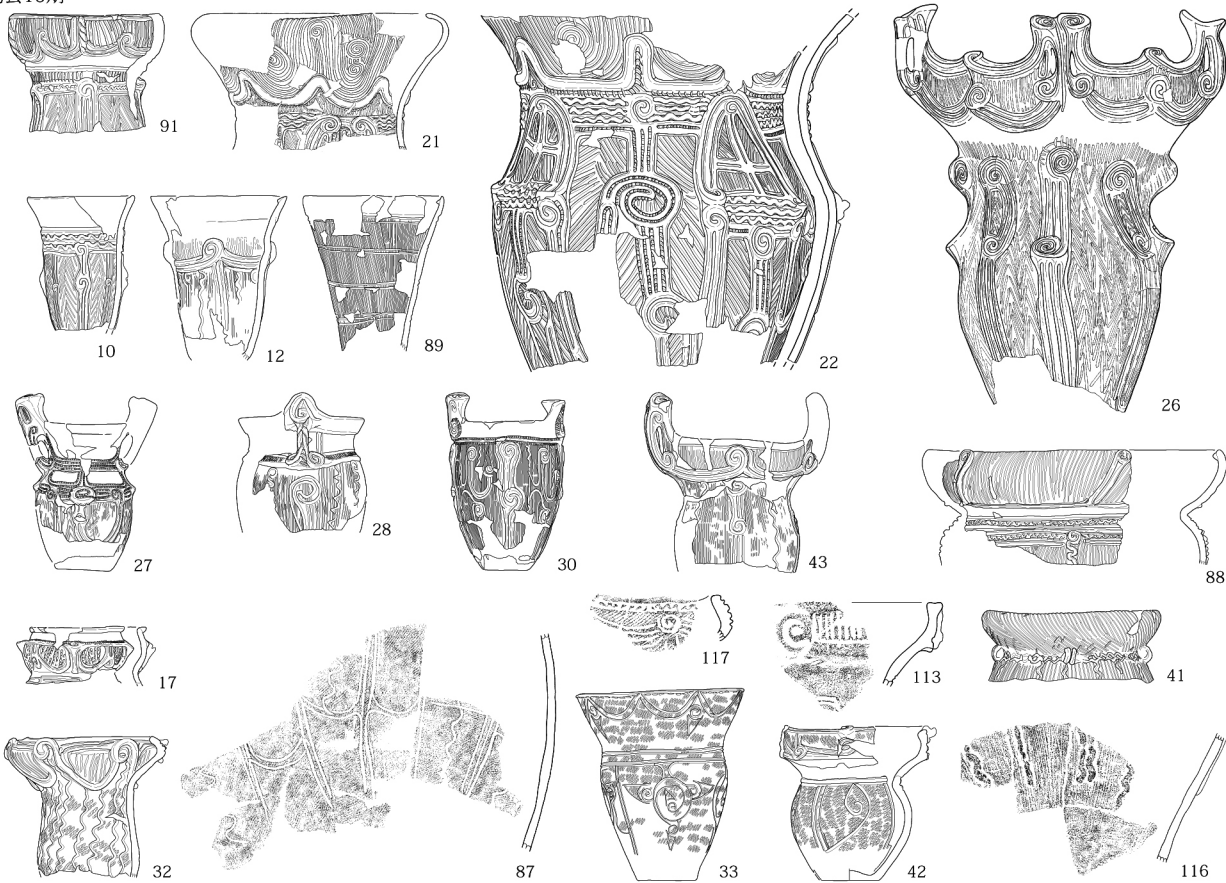


図8 土器敷炉

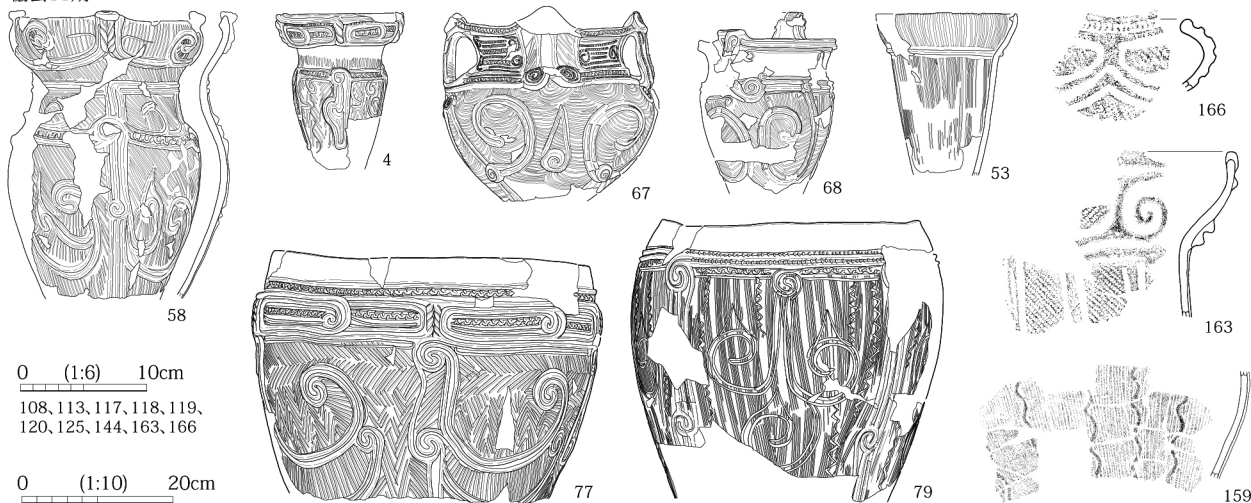
協会9期



協会10期



協会11期



0 (1:6) 10cm

108, 113, 117, 118, 119,  
120, 125, 144, 163, 166

0 (1:10) 20cm

図9 縄文時代中期後葉土器の時期別様相

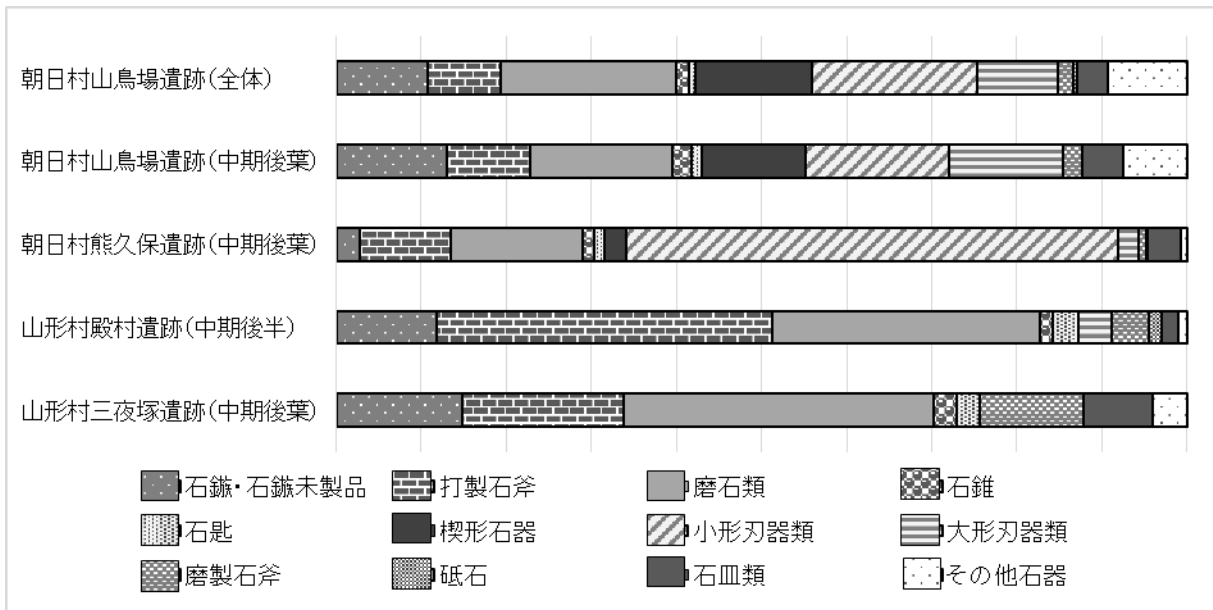


図 10 松本盆地西南麓の縄文中期後半の石器器種組成 (%)

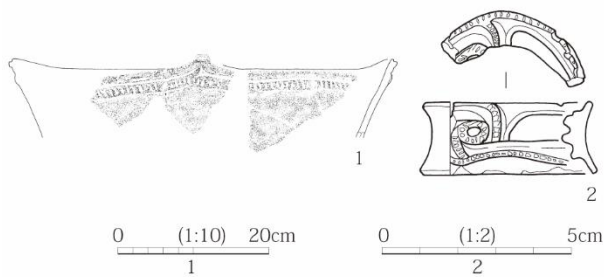


図 11 晩期初頭の遺物 (1 土器・2 土製耳飾)



図 12 1 ダイズ属の圧痕 2 レブリカ 図 13 クリの炭化子葉

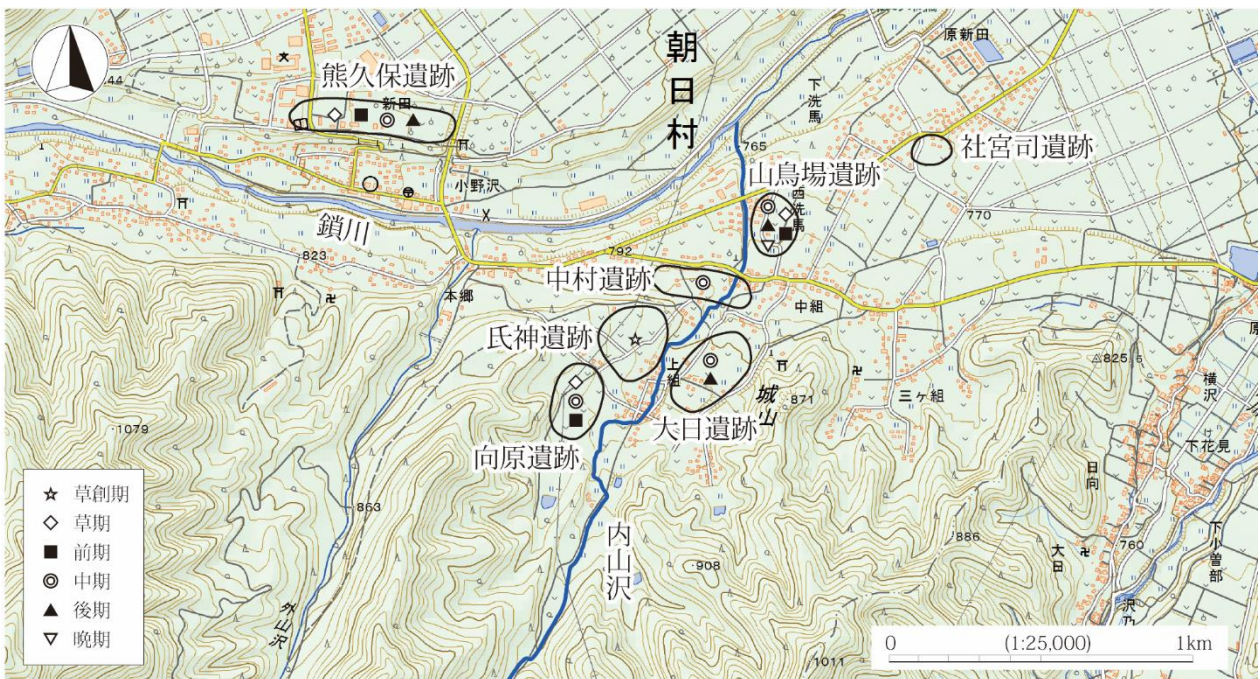


図 14 内山沢流域の縄文時代遺跡